「被害面積、被害金額0（ゼロ）」を目指して

長谷営農組合の歩み

個々の対策では効果がなかった

「きっかけは平成27年の被害でした」そう話すのは石橋洋司さん。

長谷地区は平成20年からイノシシによる水稲被害が出始め、平成27年には過去最悪となる被害を受けました。面積にして約221アール、金額にしておよそ125万円。当初から対策として電気柵やワイヤーメッシュ柵を設置していたにも関わらず、このような状況でした。

「単純にイノシシの個体数が増えてきたこともあるでしょうが、一番の原因は各々で対策していたからではないでしょうか」そう指摘するのは三原重人さん。

せっかく汗水流して電気柵を設置しても、電線や電圧の高さが地区内でバラバラでは効果が薄くなります。適切に設置されていない電気柵を経験したイノシシ個体は、電気柵自体に警戒心を持たなくなり、繰り返し被害を与えるようになります。だからこそ集落ぐるみで電気柵の適切な設置と管理が重要になってきます。

電気柵の間違い探し

「適切な設置と管理といっても簡単なことではありません。まずは知ることから始めました」と石橋さん。

平成28年に組合員を対象に初めて実地研修を開催。「研修を行う上で一番大切なのが『素直に聴く』こと。第3者の声が一番受け入れやすい」と石橋さんは続けます。そのため島根県の鳥獣専門指導員を招き、イノシシの生態や電気柵の適切な設置方法を学びました。参加できない人には「長谷営農たより」で情報共有も欠かしません。

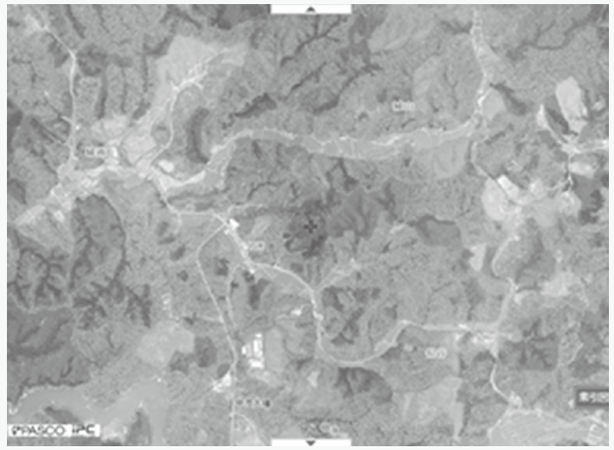
また、平成29年からは「電気柵の間違い探し」と題したクイズ形式のものや、電気柵メーカーを招いてのかなりマニアックな指導など、研修に変化を持たせながら継続させることで、電気柵設置技術の向上を図ってきました。

「守り」だけではありません。組合員でもあり猟師でもある三原さんと協力し、「攻め（捕獲）」にも力を注ぐようになりました。平成28年に29頭、29年に2頭、30年には12頭を捕獲。電柵やワイヤーメッシュ柵の効果もあり、捕獲頭数に伸びがないように感じるかもしれません。このことについて三原さんは「奥山に潜む個体より、被害を加える個体を捕獲しなければ被害は減らない」と話します。そこで、捕獲した個体に発信機を装着して行動を調査。被害個体がよく通過する道や好んで潜む場所を把握しながら効率的な捕獲を進めています。

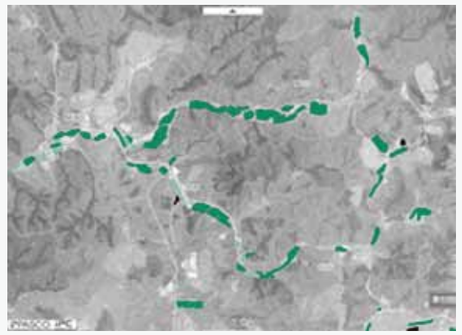
「守りと攻めに加えて、イノシシが住みにくい環境づくりに力を入れたい」と石橋さん。

昨年から竹林整備をはじめ、耕作放棄地になる可能性のあった農地を営農組合で引き取るなど周辺環境の整備に取り組んでいます。

平成29年 被害マップ



平成27年 被害マップ



研修会の様子（1回目）

設置して満足しない

「設置と管理、捕獲が目的ではありません。その後の効果検証を大切にしています」と石橋さん。

長谷営農組合では、電気柵の設置状況や被害状況を抜き打ちで調査し、収穫後に翌年に向けた対策検討会を開いています。設置状況を調査する際は、電線と電圧の高さはもちろん、1日通電している箇所数まで細かく調査。対策検討会では、その年の被害状況を共有しならら被害マップを作成。被害マップには捕獲場所なども記されています。これらの情報を組合員で共有し、次に向けて検討を重ねています。今では対策に関わる組合員が増え、活発な意見交換も増えてきたようです。

長谷地区は、営農組合が中心となり対策をしてきました。でも、これはあくまで長谷地区のカタチであり、他の地域にはその地域のカタチがあると思います。まずは周りの人たちと一緒に、自分の地区がどのような状態か、歩いて確認してみても良いかもしれません。

中国四国農政局長賞を受賞

地域ぐるみの鳥獣被害対策が認められ「中国四国農政局長賞」を3月7日に受賞されました。（中四国管内で2団体）

石橋さんは、「賞を取ることが目的ではありませんが、日頃の取り組みが、ある一定の評価を受けたことを嬉しく思います。被害面積と金額が減ったことと今回のような賞を受けたという地区としての成功体験が、今後の取り組みへの原動力になると思います」と話されました。

県の鳥獣対策室は「長谷地区の取り組みは、県が考える地域ぐるみの鳥獣被害対策の理想形。この取り組みをイノシシの水稲被害対策のモデルとして他地域へ波及していくことはもちろん、近隣地区と連携した鳥獣被害対策へと繋げていくことも重要」だと話されていました。